
神なんて嫌いだ。

まりも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神なんて嫌いだ。

【Nコード】

N3550W

【作者名】

まりも

【あらすじ】

俺は神が嫌いだ。

いつか神をコロシタイ。そう思っていた。

だが、分かっていた。神など存在しないことを。

だが、その見解を突然現れた一人の少女が壊した。

これは、その男が少女と共に神を殺す物語。

プロローグ（前書き）

ちよつとくらい話を作つてみたくて作りました。

プロローグ

【神】あなたはこの存在をどう思っているだろうか。
神聖であり、偉大な者？創造主？全ての始まり？

【神】をどう思うか。それは人それぞれだろう。
その神をどう思うかなんて、地域や国によっても変わってくる。
その中には、神が人間を創った。などというのも存在するかもしれない。

いや、そういう物の方が多いかもしれない。

まあ、神をどう思い、どう扱うかなど、一人一人多少は違ってくるだろう。

俺は、神を憎いと思う。人間などというものを創った神が。

まあ、それは本当に神がいればの話。そんなはずなどない。
だが、もし神に出会うことが出来たのならば、俺は間違いなくそいつを殺すだろう。

それほどまでに、俺は、神という物が憎い。
神を主とし、崇拝する宗教などは、壊滅すればいいとさえ思っている。

神は、人間。つまり俺たちを創った。
ただ、それだけだ。だが、俺はもう人間として生きるのが嫌だ。
人間なんて、ただ、臓器の機能によって動いているだけの物。
虫や獣と大差はない。

脳で考え、体を動かす。そんな当たり前のことも、考えてみると、
ロボットとも大差はない。

人間なんてものは、自ら望んで生まれてくるものでもない。

言ってみれば、無理やり創られ、世界に放り出されるようなもの。魂だのなんだの言っではいるが、どうせ、意識だって脳で考えているだけ。

つまり、今俺たちが意識だと思っているものも、脳の機能でしかない。

ただ、その生み出された世界で死ぬまで。脳の活動が止まるまで、人間は物を考える。

もう一度、人間もロボットと大差はないんだと思う。

ただ、知能で考え、それを体の各部位に伝え、体を動かす。それだけだ。

俺は、人間になんてなりたくなかった。

人間は、ただ一つ。一生のうちに、生きるという苦しい仕事を強いられる。

そして、一生その仕事に苦しみ、死んでいくだけだ。

趣味などは、在ったとしてもいずれ飽きる。

人間は、よく生きて100年の命。長い時間だ。

俺は、どうせ生まれるのなら、花や、虫に生まれたかった。

人間などに生まれてしまったから、何十年もの間、苦しみを背負わなければならない。

生きるということは苦痛だ。どうせ死ぬと分かっているのにそのときを生きるために動かねばならない。

楽しいことがあったとしても、苦痛が消えるわけでもない。

むしろ、苦痛が増えていくだけだ。

こんな楽しい時間をいつまでも過ごしたい・・・と。

そう思った所で、どうせ未来の運命は死だ。

そう、俺の運命などもう決まっている。どうせ死だ。後世に名前を残そうとも、そんなことが出来るのは類まれなる才能を持つ人物のみ。

俺は、この運命に絶望し、何度も自殺しようとした。だが、それを俺の中の恐怖という枷が邪魔をする。何度も、死ねたらどんなに楽か……。と考えた。答えはものすごく楽なんだろう。そうたどり着いた。

しかし死ねない。苦痛に耐えて、天寿を全うするまで逃れられない生きるという名の地獄。

次第に、俺の中で居もしない神に対する怒りがつのっていった。なぜ俺を創ったのか。と。なぜ、俺の願いを聞き、殺してくれないのか。と。

なぜ、このような苦痛を味わわせるのか。と。

いつか、俺は実行したい。
神を殺したい。

一人でもいい。とにかく、俺を創った神を殺したい。

俺の苦痛の何倍もの苦痛を与えて。

長い長い時間をかけて……。ゆっくりと、じっくりと……。手足をもぎ、斬りつけ、皮をはがし、その血肉で、豪華なディナーを作り、堪能したい。

神を……。コロシタイ。コロシタイコロシタイコロシタイッ！

その血肉で！泣き叫び許しを請う声で！その首で！

豪華なディナーを飾りたい。

勝利の宴を、神の血で彩りたい。

もし本当に神が存在し、神を殺すと世界が崩壊するとしても、それでいい。

神を殺すことが出来るのならばそれでいい。

俺に、生きるという名の拷問を続ける神など、消えてなくなればいいんだ。

俺は、そのために訓練をした。

世界中の銃の使い方を学んだ。

世界中の武術の達人の高速移動術を学び、人間離れた早さ。瞬動の域までに達した。

そしてその武術の達人にそれぞれ得意とする武術を学んだ。

それこそ、拳法や、物の投擲など様々な物だ。

神などいない。それは分かっていた。

けど、こうして神を殺すという面目で訓練をしていないと、精神が崩壊してしまいそうだった。

別にそれでもよかったのだが、それだと更なる生き地獄を見てしまう。それだけは嫌だった。

しかし、それを極めた今となってはもう現実を見るしかない。

神など、いないのだから。

そう。神などという存在などいない。

いない・・・はずだった。

プロローグ（後書き）

うん、ちょっとグロテスクな表現がありましたね。
こついった描写が無理な方は即座にバックをお勧めします。

靈力に神力。神は存在する。
(前書き)

急展開過ぎるというか・・・。
説明不足というか・・・。

靈力に神力。神は存在する。

神なんていない。そんなこと最初から分かっていた。
最近、ついそんなことを考えてしまう。

今、俺がしているのは裏山での瞬動の訓練。

・・・こんなことはしても無駄だということは分かっている。

仮に神がいたとしても、人間の銃弾など、簡単に避けられてしまう
だろう。

たとえ、当たれば致命傷になったとしても、容易にかわされるであ
ろう。

瞬動だって、神にとっては当たり前なのかもしれない。

だが、やらないよりはやっておいたほうがいい。

少しでも、神を殺せる可能性があるのなら、その可能性をあげるこ
とこそが、今現在できることだ。

しかし、神などいない。

居たとしても、ただの人間である俺が、会えるわけもない。

「ふう。」

今日の訓練を終え、帰路につく。

帰路は下り坂なので、あまり疲れない。

もちろん帰路も瞬動で移動だが。

「ん？」

いま、何かが見えた。

帰路の途中の草むらに、大きい何かが……。野犬や猪なら狩ろう。今日の夕食にする。

えっと、確かこの辺り……。これは！？

「う……。ううう。」

そこには日本人離れた綺麗な白い髪の少女が居た。

「おい、大丈夫か？」

「う……。？」

大丈夫そうにないな。どうする？家に連れて帰るか？

別にかまわないが、俺の家には神に対する罵詈雑言が所狭しと書いてある。

まあ、見られたからってまずいものでもないしいか。

明日になったら親も見つかるだろう。

それまでの面倒なら俺一人でも大丈夫だよな。

倒れていた少女は、高熱に、怪我。さらにやけどと見られる痕が複

数あった。

何をしたらこうなるんだろうか？

家が火事になったとか？

いや、それはない。ここ最近そういうことは聞かない。

つまりこの少女自身に聞くしかないって事。

ま、正直どうでもいいんだけどな。

ちょっとした好奇心ってやつ。

「う・・・ん？」

眼が覚めたかな。

「大人しくしてろ。熱があるんだ。」

39度な。

「これくらい・・・平気。」

どこが平気なんだよ。そんな体で。

「霊力は回復・・・してる。霊力の全てを回復へ回して・・・。」

んあ？霊力？何だそりゃ・・・ってなんだ！？

傷が・・・消えていく？やけどの痕も消えている。

どう言う事だ？

「おまえ、名前は？」

少し警戒し、ハンドガンを手にもって話しかける。

「・・・リオン。」

リオン・・・ね。

「じゃあついでにもう少し質問に答えてくれ。なぜ、山の中で倒れていた？」

「・・・」

「どうした？言えない事情でもあるのか？それなら別に・・・」

「・・・神に・・・」

え？神？また嫌な言葉を。

「神に・・・やられた。」

神にやられた？確かにそうだったんだよなこいつ。本当なら・・・。

・・・いや、きつとこの子は何処かの宗教の信者なんだろう。

自分が何らかの悪事を働いたせいで天罰が下った。

そういう思い込みだろう。

「はいはい。神様に天罰でも下されたとか？」

「いや、ちがう。」

??じゃあなんなんだ？

「私は神を殺しにいき、返り討ちにあつたんだ。」

神に返り討ち・・・？神・・・神だと！？

バンッ

「ふざけるな！神なんてものがあるなら、その証拠を見せる！」

神なんてものが本当にいるのならば・・・いや、そんなものはいない。分かりきっているじゃないか。

「・・・わかった。」

わかった！？どうやって証明するつもりなんだ？

「見て。」

ブウン

なっ！？これは・・・火の玉？

「この力は霊力。生物が死んで、霊になって始めて使える力。」

れ、霊力？幽霊の力か！？

「でも！それならお前は何で使えるんだ？お前は生きてるじゃないか。」

「私は、一度だけ死んでる。」

「は？」

「今の私は、一度死んでいる。死んで霊体になった私の霊をもう一度体に埋め込むことで、霊力を使えるものとして受肉した。」

「どういうことだ？つまり、幽霊になってからまた生き返ったってことか？」

「なるほど。まあ日本でも陰陽師とか聞くし、無理な話でないのかもしれない。」

「話をもどす。この霊力は、他の力にない特殊な性質を持っている。」

「

「と、特殊な性質？」

「ああもう！やっと話についていけると思ったらまたややこしいことを！」

「そう。この霊力こそが、唯一、神の持つ神力に対抗できるの。」

「神力？」

「そう。全ての神がもつ力。力の類ではおそらく……いえ、確実に一番の力がある。」

「なるほど。それに抵抗できるわけか……ってなに納得してんだ俺？」

「魔力や気。はたまた念力でさえもこの力には無力。それほど神力とは強力なの。」

それで、それに抵抗できうる力を持つのが、霊力。」

そういうことね。大分ファンタジーになってきた。

「でも、それだけじゃ神がいる証拠にはならないぞ。」

「大丈夫。これから見せる。」

リオンは手に霊力の弾……火の玉（仮）を作り大量に空に飛ばす。

それを花火でも見るように見上げていると、どこからともなく、

リオンのものと同じぐらいの球体が飛んできて火の玉（仮）を打ち落としていく。

「……あれが神の力。神力の攻撃。」

今のは様子見程度だったけど本気で行くとこの街は消し飛ぶ。

神は下界……つまり人間が住む世界を壊すことは出来ないからでもそれはこっちも同じ。こっちからの攻撃じゃ下級の神に傷が少し付く程度の攻撃しか出来ない。

だから神と戦うには天界……つまり神がすむ世界に行かなければならない。

天界は神力によって空間から隔離されている空間。普通の人間じや見ることも入ることも出来ない。

でも、霊力を使えるものなら、天界に入ることが出来る。」

「霊力が神力に対抗し得る力だから？」

「そう。霊力と神力はどちらも同じぐらい万能。どちらが強いともいえない。」

使い手や、使い方。どういう用途に使うかによって変わる。

つまり、神力と霊力は全く互角。そして、傷の回復。物質の強化。その他諸々。

魔力に近いものではあるけど魔力なんかとは強さが桁違いに違う。

「

「でもさ、それなら両方使える奴がいたら最強なんじゃないか？」

リオンは首を横に振る。

「神力は、人間には使えない。神力は唯一神のみ使える力。」

逆に、霊力は人間のみ。神には使えない。」

「何で使えないんだ？神力は分かるけど霊力は神なら使えそうな気もするが。」

「一応理由はある。人間が神力を使えないのは神力は位が高すぎて人間をはるかに凌駕しているから。逆に、霊力の場合、神が使うにも一回死ぬ必要がある。でも、神の体は位が高すぎて、

幽霊なんていう妖怪・・・つまり化け物はその体に入ることは出来ない。」

「・・・私も神と戦いに行ったとき、霊力で魂に直接攻撃しようと思ったら、弾き出された。」

そしてその隙をつかれ、下界の町に落とされた。」

なるほど。でもきになることが。

「なあ、じゃあ何で山で倒れて居たんだ？怪我くらい自分で治せるんだろ。」

「・・・霊力をすごく消費してて、食料を探して山に入ったときに霊力が切れた。」

そのせいで怪我也治せなかった。怪我は治したかったけど、直したら霊力が全部なくなる。

だから霊力を出来るだけ使わなかった。今まで生きていたのはそのおかげ。」

「神との戦いで霊力を？」

「・・・（コク）」

なるほど・・・。

「つまり、今までの言動から考えると、お前は神と敵対する立場にある・・・。それでいいな。」

「（コク）」

俺は銃を下げる。

そうか。本当に神なんていたんだな。感激だよ。

「なありオン。初対面でいきなり悪いが、頼みがあるんだ。」

俺の部屋。

そこに俺とリオンは向かい合って座る。

神への罵詈雑言に囲まれて。

「ホントにやるの？」

「ああ、俺はこのときのためだけに生きていたようなものだから。」

そう、俺が今リオンに頼んでいるのは俺を殺すこと。

俺を殺して、リオンと同じ状態にして欲しいと頼んだ。

霊力というものが在れば、俺が神を殺す確立が一気に跳ね上がる。
鉄砲がある。おそらくただの銃弾程度なら神力で阻まれてしまうだろう。

だが、それが霊力で何らかの処置を施したものだっただら？

弾に細工を施し、神にも効く銃が出来る。

それを使えば、神をも殺すことが出来る。

俺の悲願を達成することが出来る。

しかし、霊力とは言っても、妖怪を操ったりは出来ないようだ。

主な用途としては物質の強化。身体強化。

傷の回復や先ほどリオンが作った火の玉のようなものも作れるそう
だ。

ちなみに靈力をフルに使えば町一つ壊滅させるくらいはできるらしいんだけど、俺には無理らしい。

そんな馬鹿げた威力の攻撃はリオンの家の家系の者や、その他の名家などの人間にしかできないそうだ。

何でも最初に靈力が開花した家系の派生が今の靈力を使う名家なの
だとか。

俺にできるのは最初に言った身体強化などだけらしい。

そして、リオンと俺の目的は同じ。神を殺すこと。

リオンは理由は話してくれなかったけどそれは追々聞くことにする。

ここで言うておくがもう既にリオンとは契約済みだ。

契約内容は神を殺し尽くすまでの同盟。

まあ、元々敵じゃないけどな。

今思えば今ものすごく運がいいんだ。

だってそうだ。かなうはずのない夢がかなうかもしれないんだから。

まあ、そんな華やかな夢じゃないけどね。

まあ、その一歩目として一回死ななければならぬんだ。

「頼む・・・リオン。」

「わかった。」

リオンは懷から儀式用（？）の短剣を取り出す。

赤や緑の装飾のある剣だ。

そしてそれを・・・俺の左胸に刺した。

ズブリ

嫌な音がやけに明確に聞こえると共に、左胸に激痛が走る。

「う・・・グ・・・アア・・・。」

いてえなあ。まあ、これも悲願のため。甘んじて受けるさ。

そういえば、リオンもこんな痛み・・・味わったのか・・・な？

俺の意識は、闇に沈んだ。

靈力に神力。神は存在する。（後書き）

短いし。

駄文だし・・・。

夢と目覚めと霊力。(前書き)

遅くなった・・・。

何回も書き直した・・・。

しかしそれでもこの程度・・・。

これが俺の限界か・・・。

夢と目覚めと靈力。

夢を見た。

深い森の中。ひっそりと存在する広大な邸。

その邸の前にある薄汚れた表札には『ルーネリア』の文字がある。
常に物静かでありそうなこの邸。しかし、このときは違っていた。

夜の森で赤く燃える邸。

邸に攻撃を仕掛ける十数人の集団。

そしてそれを指揮する見た目25歳位の青年。

そしてその攻撃を青白い何かの壁で防ぎ、あるときは反撃する二人の男。

その集団の攻撃も、二人の男の攻撃も、一つ一つに邸の大半を吹き飛ばすほどの威力があった。

そんな戦いの戦場となっているのだ、邸はもう原形も残していない。

鉄で作られた数本の柱が立つのみだ。

その男たちは強かった。しかし段々と数の暴力にさらされ、少しずつだが劣勢となってゆく。

そしてついに邸の一番奥にまで男たちは追い詰められる。

そこには幼い白い髪の女の子と、白い髪の女性が居た。

女性は、子供に逃げるよう言い、自身も男たちに加わって戦った。

女性も強かった。女性が加わったことにより、劣勢は優勢へと変化する。

もう少しで相手も引いてくれるだろう・・・そう思うほどに優位に立っていた。

しかし。その優勢も十分と持たなかった。

指揮官の青年。それが出てきた。

ただの指揮官ならば何の力にもなりはしなかっただろう。

しかし、この青年は別格だった。

男の一人が剣を持って青年に切りかかる。

その剣が青年に届く・・・その瞬間は訪れなかった。

剣が届く前に、男の首は、青年の手に握られていた。

もう一人の男は、一瞬怯みはしたが腰の剣に手をかけた・・・はずだった。

その手が触れたものは、剣の柄ではなく地面に落ちているただの石だった。

そのとき男は自分の手が切断されていることに気づく。

しかしそれに気づいたときには、自身の首も切り落とされていた。

その光景を目の当たりにし、女性は恐怖に震える。

恐怖に竦む足を懸命に動かしながら、先に逃がした娘の元へと向かう。

娘は案外近くに居た。

母の姿を確認し、笑顔で母の元へと走ってゆく。

少女が母の腕の中へと飛び込む瞬間、母の体は、横一文字に両断されていた。

少女の飛び込んだ物は、先ほどまで生きていた、母の下半身だった。少女にはまだ何が起こったか分からず、二度三度と母の上半身と下半身を見直して、

やっと真実にたどり着いた。

母は、殺されたのだ・・・と。

両断された箇所から血と臓物が溢れ出てくるのを半ば放心しながら見る。

母の体はまだビクビクと動いている。しかし生きてはいない。

幼いが、頭のいい少女にはそれがすぐ分かった。

やがて少しずつ母の敵が近づいてくる。

少女の頭の中には自分ももう殺されるんだ・・・その言葉しかなかった。

母も殺された。おそらく父や兄も殺されているだろう。

もう殺されるならそれでよかった。父や母の元にいけるのだから。

母親を殺した指揮官の青年は少女を見下し、その絶望にゆがんだ目を見る。

そして口元を吊り上げにやりと笑うと、少女を殺さず、後ろで待機している仲間の元へと向かう。

少女はこのとき自分が助かったのだと理解した。

なぜ助かったのか？そんな考えは浮かんでこなかった。ただ浮かんできたのは憎しみの感情。

同時に復讐してやるとも誓った。

自分を生かせておいたことを後悔させてやる・・・と。

必ず母や父を殺したようにお前も殺す・・・そう誓った。

そして青年の背中をにらむ。青年は仲間の元にたどり着き、何かの話をしている。

そして、そのときに聞こえた青年の名前を少女は心に刻み付けた。

必ず・・・必ず殺す対象として。

母や、父、兄の命を奪った張本人。

その後将来忘れることも無い、その青年の名前は・・・。

「っは!？」

今は・・・夢？

ずいぶんとグロテスクな夢だったが・・・。

なぜかただの夢とは思えないんだよなあ。

それにあの少女は・・・リオンに似てたよな・・・？

それに造物主^{クリエイター}って・・・すごく物騒なやつが・・・。

まあいいか。後で分かるだろう。

・・・で、今現在問題なのは俺のからだの周りにある青白いものだ。

これが霊力ってやつなのかな？ハア、ほんとにあったんだ、こんなもの。

それは俺の胸・・・鳩尾の辺りから少しづつ湧き出ている感じた。

湧き出てからゆっくりと俺の体を覆い、少しづつ体から離れる。その繰り返しだ。

で、こんなものが見えるし生きてるってことは一応成功したってことか？

これで俺も晴れて妖怪ってか？

それにしても体がだるい。今何時だ？俺はどのくらい寝てた？

・・・四日間！？

嘘だろ・・・。仕事に行かないと・・・。ケータイケータイ。

【メールが六件あります。】

多いな・・・。まず一通目は・・・。

差出人：上司

遅いぞ！早く来い！今日は明日の取引の話をするはずだろう！

ああ、そんなこともあったっけな。

で、二通目は・・・。

差出人：上司

お前！結局来なかったじゃねえか！何考えてんだよまったく・・・。

ごめんな。しょうがなかったんだよ。

三通目・・・上司

遅いぞ！今日は取引だ！早く来ないと間に合わない！

四通目・・・やっぱり上司

バカヤロー！何で来ないんだ！俺一人で取引したんだぞ！
それと・・・明日も来なかったらクビにするって社長が・・・。

五通目・・・（ry

早く来い！後一時間で来なかったらクビにするって社長がもうかん
かんだぞ！

俺も何とか長引かせてみるが・・・。

六通（ry

残念だ・・・。お前はいい部下だったのに・・・。届け物なんて一
分でしてくるし・・・。

本当に残念だ。できればまた戻ってきてほしい。無理だとは思うが・

・。
・。

・。
・。
・。
・。

・。
・。

・。

・。

「ノオオオオオオオオオオオオ！」

ちくしょう・・・仕事が・・・。

まあ五年は暮らせるだけの貯金はあるが・・・。やっぱりなあ。

はあ、つらいよ「起きた？」何だリオン。

ちなみにリオンには俺の家の物は勝手に使って良いと言ってある。

「四日間しか眠っていない・・・。」

「いや、四日間も、の間違いだろ。」

「いや、しか。普通なら数ヶ月は眠るはず。目覚めるのが早いのは相性がいいからかもしれない。」

「相性？」

「そう。霊力というものはその名のとおり霊の力。そして、霊の殆どは悪霊や、怨霊。」

「なるほど。」

「それにもともと霊というものは恨みや未練によって出てくる。その殆どが憎しみや恨み。」

そして悪霊や怨霊の力はどれだけ恨みや憎しみが強いかに比例する。

私たちの霊力は悪霊や怨霊の力を使うようなもの。つまり、使用者が何か強い恨みを持っていたりすればその分威力も上がる。そして恨みや憎しみが多いほど霊力と共鳴し、引き合う。」

「つまり、俺の恨みや憎しみが強かったから相性がよかったと？」

「そう。相性がよければ霊力も増えるし、威力も上がる。」

「なるほど……。じゃ、後で使い方を教えてくれ。まずは朝飯だ。」

「うん。」

「さて、パンとスープでいいか？」

「だいじょうぶ。」

「そうか。」

さてと、レツクッキング！

女の子に食べてもらうのは初めてだから簡単な料理で。

スープは市販のインスタント。

パンは『もっちりぷよーん』が売り文句のプヨプヨパン。これが結構うまいんだ。

お湯を沸かすこと五分。お湯でスープを作りリオンに渡す。

特に何も言わずに食べてくれた。プヨプヨパンには少し困惑していたが。

さてと。俺は何食うかな？

パンはさっきので最後だから・・・スープだけで栄養摂取だな。

さてと、皆さんにレシピを公開しよう。

スープのもと一袋。

塩大さじいっぱい

砂糖大さじいっぱい

ビタミンCカプセル×3

鉄分カプセル×3

ごま油少々。

これで栄養は大丈夫！！・・・なはず。

味は・・・まあ飲めないことも無いな。リオンには飲ませないが。

ああ、これからどうなるんだろうか。

神と戦うといっても俺の修めたものが通用するか分からない。

ま、殺せるだけは殺すし、殺せなかったらまた策を練ればいい。

そのためにも、ちゃんと霊力を使いこなさないとな。

少ししたらリオンにいろいろ教えてもらおう。これからのために。

夢と目覚めと霊力。（後書き）

混沌スープ。試してみてはいかがですか？

たぶん天国が見れると思いますよ。

プヨプヨパン。自分は絶対食べたくないです。

霊力の使役。収束系と強化系。（前書き）

やばい。めっちゃ投稿遅れた・・・。

霊力の使役。収束系と強化系。

夜、家の庭にて、

「じゃあ、霊力の使い方を教える。」

「おう。どんと来い。」

よう。
阿断神哉だ。あたちしんや え？誰だって？

俺はつい最近女の子を拾ってその子に殺された挙げ句に

ファンタジックな世界に足を踏み入れたただの一般人さ。

つまり今まで名前が分からなかった主人公さんだ。

ただ、名前に神の字があるのが不快だが。まあ、今は亡き親がくれた名前だから大切にしている。

そして今は、朝約束したとおりリオンに霊力の使い方について学んでいる。

場所は家の庭で時間は夜。家の庭は植木や花壇などのものが一切ないから思った以上に広く使える。

ちなみに、地面には砂利が敷いてある。

塀はかなり高めなので外から覗かれることはまずない。

まあ、隣の家の窓からなら見えると思うが、お隣は今外出中だ。

「霊力は、基本何もしなくても防御力を上げてくれる。たとえば、並みの包丁程度なら傷すらつかない。けど、切れ味のいい業物の刀とか、貫通力のある銃弾は防げない。あくまでその程度だから過度な期待はしてはいけない。けど、無いよりはあったほうが幾分かまし。ちなみに、これは衝撃などにも反映されるから、高いところから飛び降りても足に負担が行かない様にする・・・ということも、霊力を使用すれば可能になる。」

なるほど。まあ、あまり強力ではないけど、体を保護してくれているようなものか。

それほど強力じゃないにしろ、これはかなり有難い事だ。

俺がいくら鍛えていたとしても、所詮人の身。高いところから飛べば恐怖もあるし衝撃もある。

高いところから飛ぶ場合、落ちたときの衝撃でかならず体は一瞬硬直する。

それは大きな隙だ。飛んだところを相手に確認されて居たら、落下地点も推測される。

そしてそこに攻撃を構えられたら完全に無防備となる。

しかし、この能力ならばそれを気にしない。落ちて、即行動できるというのはかなり有難い事だ。

まあ、靈力を使わなければそこまでは出来ないらしいが。

「それで、攻撃だけど、攻撃には二種類ある。」

「二種類？どんな攻撃だ？」

「まず一つは靈力を収束させて放つ攻撃方法。この前の靈力弾や、もっと大きくした物もある。靈力弾の場合、威力は小さいけれど速攻性と数量に長ける。大きいものはポンポンと使えるわけではないし、連射できず、隙も大きい。けれど威力は絶大。」

「なるほど。一長一短。どちらを選んでもデメリットはついてくる・・・か。で、もう一つは？」

「もう一つは、物質に靈力をこめて強化して戦う方法。利点は自己強化が出来る点と、遠近、どちらでも変わりなく戦えること。デメリットとしては、武器に頼る点や、自己強化しても本人に武術の心得がないと戦っても勝てる望みは薄い。それから大怪我をする機会が増える・・・そう言った所。でも、こちらはバランスがいいから扱いやすい。」

「・・・リオンはどっちだ？」

「私は収束。魔力弾を大量展開して相手を疲弊させたところで大きな攻撃・・・私たちは収束砲と呼んでいる物を叩き込む基本的な戦い方。私としては神哉には強化を選んで欲しい。前衛を任せて後衛の私が収束砲を打つ機会を窺う・・・そういう戦い方が理想。」

なるほど。前衛に戦闘を任せて後衛が溜めの大きい大威力のものを

ぶつ放す……。そんな戦法か。

確かに合理的だ。じゃあそっちにしたほうがいいか。俺としても、接近戦の方が得意だし。

やはり確実な勝利を求めるのならこの方法が一番良いだろう。

大怪我をするって言うのはまあしょうがない事だしな。

どうせ後衛を選んで、前衛が居なくて攻撃がこちらに来るんだからどっちを取っても同じだと思う。

なら、少しでも勝つ可能性が上がるほうにやるのが一番いいはずだ。

まあ、やはり前衛の方が怪我也増えると言うのは正直怖いが。

「じゃあ俺は強化を取るよ。少し考えたけどそれが一番良いと思う。」

わかった。そう言って頷くリオン。

「じゃあ、練習を始める。まず、強化の基本の自己強化から。これはさっきも言ったとおり、筋力や、俊敏性の上昇。衝撃を緩和したり、攻撃から身を守る……。そんな効果がある。これは前衛にとってもっとも大事な事だから使えるようになっていたほうがいい。」

確かに俺は武器がなくても何とか戦えるから、怪我をしにくくなったり筋力が上がったたりすると助かる。

「分かった……。けど、どうやってやるんだ？まずそこから教えて

もらわないと。朝からなんとなく靈力を弄っていたら多く出すとか、少なくするとかはまあまあ出来るようにはなったんだけど・・・。

やっぱり本格的なものは見本があったほうがいいと思う。リオンは自己強化できるのか？いや、無理なら無理でもいいんだけど・・・。

「

やっぱりリオンは収束らしいから無理かもしれないけどな。出来るなら手本を見せて欲しい。

やっぱり手本があるほうがいいしな。ほら、野球とかでもただ本とかなを見て覚えるより実際やっているところを見たほうがやりやすいだろ？

「一応・・・出来る。」

「出来るのか？収束の方だから出来ないかと思っていただけだな。」

「

俺がそう言つとリオンは首をぶるぶると可愛らしく振り、答えた。

「別に、収束は強化を出来なくて、強化は収束を出来ないというわけじゃない。ただ、収束を選んだ人は、強化を扱いにくくなる。つまり、基本の自己強化しか行えず、更にそれにも強化系の何倍もの靈力を使用する。靈力とは文字通り靈の力。力と言う物には必ず限界がある。それは力の中でほぼ最強を誇る靈力といえども例外じゃない。だから、収束系の人は強化をあまり使わない。元々収束系は魔力を大量に消費するタイプだから・・・。」

フムフム。つまり一度決めちゃったら他のは使いにくくなるって事かな？

簡単な説明にしたら『魔法使い以外が魔法を使えばMPを倍消費します。』みたいな感じかな？

つまりリオンは強化を使えるけど、そんな事するなら霊力弾を増やしたほうがいいって事か……。

「まあ、つまりは適正の問題。収束には強化の適性はなく、その逆も叱り。」

ほほう……。まあ、使えるのなら良かった。リオンには悪いけど、見せてもらうことにしよう。

「じゃあ、すまないが見せてくれ。一回でいいから。」

一回で良いと言うのは昔武術を習った人が、この霊力に似た気とか言うものを使っていたからだ。

その時、なんか氣の流れを見ろっ！みたいな事を言われて、やらされていたからそう言う力の流れを見る……。とかはわりかし得意だあと、リオンに負担を掛けたくないしな。

「分かった。じゃあ、良く見ていて。」

「おう。」

短く答え、意識を集中する。リオンの霊力を凝視する。些細なことでも見逃さないように。

……。ん？おお、変化し始めた。

フム。そんな風にしたら身体強化が出来るのか。霊力って不思議だな。

「出来た。私は少し時間が掛かるけど、強化を選んだ人なら慣れたら一秒程で出来るようになる。それで、強化したらこんなことが出来る。」

そう言つて隅の方に立て掛けてあつた木刀を持つて来る。

そしてそれを・・・片手で折つた!?

うわ・・・。あんなスプーン曲げ見たいに折れるなんて・・・。これで適性が無いとか・・・。

マテ、適性の高いやつがつかつたらどうなるんだろうか? 辺り一帯クレーターだらけになるんじゃないだろうか?

ふう。いかんいかん。思考がそれた。

さて。強化だが、強化方法は霊力を体に纏つて使うのではなく、霊力を取り込んで体の内側から強化するって感じだったな。

俺が見ていた限りでは、リオンの纏う霊力がいきなり増え、それからすぐに減つて行つた。

そこを良く観察したらリオンの体に霊力が取り込まれていつているのが分かつた。

更に言うと普通は体から離れていくはずの霊力が離れずにとどまっ

ていた。

その後纏う霊力の量は普段と変わらなかったが・・・なんて言うんだろっな？纏う霊力は同じ量。更に体にもなんら変化は無いのに、そう。自分ではリオンには絶対に勝てない。

そう体感した。

俺の持つ体術や武器。それこそ重火器を使っても傷一つ付けられない。そう思った。

・・・こんな奴らの戦いつてどんなだろうな？

「・・・じゃあ、神哉もやってみて。やり方は分かったでしょ？」

「え？あ、ああ。分かった。」

・・・少しボーっとしていたみたいだ。声をかけられてびっくりした。

まあ、やり方は分かったしな。やってみるだけやってみるか。

よし、まずは纏う霊力を増やす。・・・よし、できた。これは朝から暇つぶしでやっていたことだから簡単に出来た。暇つぶしでやったことが役に立つなんてね。

そして、取り込む・・・？

？！取り込むってどうすればいいんだ？

良く分かんが・・・とにかく、何事にもイメージって大切だよな。

とにかくイメージしてみる。目をつぶって、瞑想をするときみたいに集中する。

そして、自分の体に霊力が取り込まれて行く光景をイメージする。

イメージ・・・イメージ・・・。

・・・

・・・

「・・・ふう。難しいな。まあ、一回で成功するわけでもないか・・・。」

はあ、やっぱり無理か。イメージって言ってもなあ・・・。結構難しいもんだ。

「いや」

「へ？」

急にリオンが俺の近くに来た。

「いや、失敗してない……。すごく弱いけど、成功してる……」

「え？本当か？え、いや、まじで？」

ものすごく動揺しながらもリオンが折った木刀の半分を持ち、力を込める……。

バキィ

「うおっ！？」

折れた……。簡単に折れた。いや、強化なしでも折ることは出来ただけ。

でもこんなに簡単には折れなかった。もっと本気で力を込めないと……。

改めて実感する。少し成功しただけでこれかよ……。

うわぁ。一回死んで生き返ったってだけで妖怪みたいなものなのに……。

俺は今よりも強くなれるのかな？いや、強くならなくちゃいけないな。

それこそ、化け物と呼ばれるくらいに。

待ってやがれ糞神様。いつか絶対、お前達をブチコロシテヤル。

絶対に・・・。

霊力の使役。収束系と強化系。（後書き）

中々バトルが掛けませんね……。まあ、バトルを書くのは下手だ
けどさ……。。

まあ、頑張らないとね！

感想をくれると作者が喜びます。

天界へ（前書き）

更新できた……。やっとできた。

今回はあまりシリアスは入りません。

物語りもそこまで進むわけでもないです。

すいません。次の話でいろいろと新キャラを出すつもりです。

このような駄文を読んでくださる方々、本当にありがとうございます。

誤字脱字。おかしい点などありましたらご報告していただくとうれしいです。

アドバイスや、感想などもお待ちしております！

では、本編をどうぞ！

天界へ

「・・・・・・・・んあ？」

ん？・・・あ、ああ、朝か。

今何時だ？なんだ。まだ九時じゃないか。仕事は無いんだからもう
ちよつと寝ても・・・。

いや、駄目だ。今日は予定があつた。

あはは、実は・・・・・・・・引越すことになりました。しかも天界に・
・。

なぜこうなつたかと言つと・・・・・・・・まあ、こう言つ事だ。

十三時間程前。

俺は一回成功したことでコツを掴み、数時間で身体強化を覚えるこ

とが出来た。

やはり俺は余程霊力との相性が良らしく、身体強化は普通数週間掛けて覚える物らしいけど、数時間でモノにしてしまった。

武器などの強化も、複雑な物でなければ出来る様になった。

例えば、木刀等の単純なもの・・・つまり、複雑な構造をしてなければ強化できるようになった。

逆に、銃などの構造が複雑なものは強化が難しい。

まあ、木刀が出来る様になっただけでも、十分収穫だ。

それ以前に僅か数時間で此处まで出来た事こそ最大の収穫なのだが。

そして、木刀程度なら一秒と掛からずに強化できる様になった頃、リオンが提案してきた。

「神哉。天界に移ろう。」

「へ??？」

なに言ってるの？天界って神の住処でしょ？

「天界って神の住処だろ？何でそんな所に行くんだ？」

「・・・勘違いしてそうだから言うけど、何も天界に住むのは神だけじゃない。」

「え？そうなの？」

「天界には天使もいるし、動物もいる。動物と言っても小動物とかだけ。」

まあ、凄く大きい動物も居るけど・・・と、リオンは付け加える。

「そうだったのか・・・。」

「それで私が行きたいのは、霊力を使える人間が集まって作られた町。」

へー。そんな物があつたのか・・・。つて、ちよつと待て！

「まってくれ。何で天界にそんな町があるんだ？霊力を使うものと神は敵同士なんだろう？」

「そう。だから、その神に対抗するための拠点として村を作つただけど、何十年と睨み合いをしている内に人も増え、下界の技術も発展した。で、何代目かの村の長がその技術を積極的に取り入れ、村を町にまで発展させた。」

「つまりそのまま戦い続けてるってことか？」

「まあ、そういうことになる。でも、お互いに、敵の戦力を把握し切れていないから、睨み合いのまま何十年も大きな変化はなかった。偶に神が攻めてくることはあつても、せいぜい、そこそこの名知れている神が来るぐらいで、そこまで苦もなく撃退してる。来るのも、十年に一回ぐらいだし、お互いに本気で攻めようとは思っていないから、一応平和。」

なるほど。確かにそこなら動きやすいし、運が良ければ適当な協力者でも得られるかもしれない。

「たぶん、神が攻めてくる理由は単にこっちの戦力を測るためだと思う。いつもすぐに撤退するし。」

ふん。神でもそんな事するんだな。神様なんだからもっと、こう、遠くの事を見ることができる鏡とか持っていて不思議じゃないけど。やっぱりそこは霊力とかで防いでいるのかな？

「分かった。じゃあ明日にでも出発しよう。荷物をまとめてくるよ。」

荷物を纏めるのには一時間半あれば十分かな？家はどうしようか？親が死んで、一人息子の俺が譲り受けた物なんだけど、かなり広いし、庭もある。デパートや、コンビにも近くにあるし、駅もかなり近い。一言で言えばかなり良い家なのだ。

誰かに貸しておくのもいいが、それだともし戻ってくるときがあったら不便なので却下。

でも放置って言うのも勿体無いと思う。どうするかな・・・？

売り払う？いや、駄目だ。こんな良い家そう有る物じゃない。

だったらどうする？うん。もう放置でいいかな？草が生い茂ったりするかもしれないけど、それはそれで帰ってきたときに考えればいいか。それにしても引越しか・・・ん？

「そう言えばさ、俺らって天界に入れるのか？拒まれたりしない？」

だって元々神の住居だろう？

「そこは大丈夫。霊力を使える人間が、自分たちが下界と行き来できるように作った道があるから。そこを通る。場所は確か・・・この国の、キョウト？だったはず。」

「え？京都？すぐ近くじゃないか。」

ちなみに俺が住んでいるのは大阪。京都はそんなに遠くない。

それにしても、京都か。なんか納得できる。なんかさ、物の怪とか、妖怪とか、幽霊とかって聞くと、

なんだか京都を連想してしまう。何でだろうね？

たしか、昨日知り合った幽霊のおじさんも京都から来たとか言ってたな。

何でも、京都に出張の途中に車に轢かれたそうだ。実家のある大阪に戻ってきたとか。

そう言えば、この前男性が車に轢かれるってニュースがあったような・・・。

場所は京都だったかな？

あのおじさんは幽霊になっても、不自由じゃないってたな。むしろ楽しいらしい。

話を聞く限り、『実家に戻って親父やお袋と過ごすのも悪くねえや。あっちからは見えねえけどな。ハッハッハッ!』との事だ。夫婦喧嘩を見て楽しんだりしているらしい。

霊力を使えるようになってから、幽霊が見えるようになった。

知ってるか？この町に、幽霊の溜まり場的な所があるんだぜ。

俺が行ったら『何で人間が此処に！？って言うか俺ら見えてる！？』って言うてた。

いや、霊力の特訓の途中で、散歩に言ったんだよ。二時間ぐらい。かなり長いつて事には目を瞑ってくれ。ちゃんと睡眠を二時間減らしたさ。寝不足だよコノヤロー。

で、散歩でおっちゃんに会って、溜まり場を教えてもらい、そこに行ったら幽霊がいっぱい居たって事だ。あそこに有った屋台がやたら美味かった。経営者幽霊だけど。

話がそれたな・・・。

「で、引越して何もって行けばいいの？」

「あの町では、主に日本の通貨が使われているから、お金と、あとあなたの持つてる武器全般。倉庫にある拳銃とか、爆薬とか。あと刀もあつたはず。」

「オイ。いつの間に倉庫を覗いたんだ。」

「神哉が寝てるとき。」

「そうか……。」

この娘、ちゃんと寝てる？

「分かった。とにかく、武器と金だな。」

それだけならば簡単だ。さっさと準備することにしよう。

「あ、天界の町に行くのはいいとして、住むところはあるのか？」

「問題ない。あそこは私が育った町だし、今もそこに住んでいる。」

「そうだったのか。つまり天界に住んでたって事でいいんだな？」

「そう。だから心配ない。」

なるほど……。じゃあ安心だね。

……

俺は今駅のホームに居る。正直すごく疲れた……。

いや、荷物を持つのは全然平気なんだ。鍛えてるし。

問題は鞆の中身。こんな物持つてる所見られたらムシヨ送りじゃな

いか!!

ガチャガチャと音がしないように気をつける・・・。

鞆の壁に当たって形が外に浮き出ないように気をつける・・・。

そしてそれをする事によって余計に怪しい奴に見られないように気をつける・・・。

ハッキリ言ってこれだけでも凄くしんどい。精神がやばい。

でも・・・でもな。もっとしんどい物もあるのだよ。これが。

それは・・・俺の横で静かに電車を待っている少女。

そう、リオンだ。

リオンの髪も然る事ながら、かなりの美少女。男物の服。

長くて綺麗な髪はツインテールにしてあり、服装は半ズボンとＴシャツ。

見た目に反して多少の胸は有る為、男物のＴシャツだとやはり目立つ。

クツ！しょうがなかったんだ！男物しかないんだよ！一人っ子だし！

俺の子供のころの服しかないんだよ！

え？最初に来ていた服？ああ、ありゃ駄目だ。ボロボロだ。

着せてもいいけど完全に警察に捕まる。だって隠すべき場所が隠せてないもん。

だから家に運んだ時に俺の子供のときの服に着せ替えた。

ド、ドキドキなんてして無いんだからねっ！

お、落ち着け俺。大丈夫だ。

視線なんてない！視線なんて無い！

そつだ。あそこで話してるオバチャンも……。ってこっちみてる！？

『ねえ、あれなに？あれ絶対に家族とかじゃないわよね。（ひそひそ）』

『そうよね。髪の色も違うし、歳もかなり離れてる様に見えるし。（ひそひそ）』

『まさか、誘拐？お金持ちのお嬢様を誘拐したとか！？（ひそひそ）』

『でもそれだったらこんな所には来ないわよ。（ひそひそ）』

『じゃ、じゃあもしかして……。援助交際！？（ひそひそ）』

『あ、そうかも……。いや、絶対そうね！私の勘が叫んでるわ……。』（ひそひそ）』

→は神哉にのみ聞こえる幻聴です。実際にそんな会話は行われておりません。

（クソオ。盛大に勘違いしてやがる。やっぱりタクシーのほうが良かったか……。）

まあ、京都に着けばそこまでだ！俺は耐える！

・・・おっと。電車が来たか。

視点リオン

私は今、駅に居る。

なんでも、ここから電車に乗るらしい。

私は電車に乗るのは初めてだ。いや、見るのも初めて。

私は小さい頃に両親と兄を亡くした。その理由は聞かないで欲しい。それで、その後当ても無く泣いていた所を、今の天界の町の町長に拾われた。

その後は天界で過ごした。

元々私の家は森の奥にあったし、他の町へ行ったりもしていないから、写真でしか電車は見たことが無い。今日見て驚いた。日本の科
学って凄いと思った。

話は変わるけど、さっきから周りからの目線が気になる。

やはり私はこの国の人間ではないし、服も男の子の物だ。

家を出る前、神哉がこれしかないと言って渡してきたのがこの服だ。
最初に来ていた服は、胸元が破れ、下半身などほぼ裸状態だったため、仕方なくこれを着た。

ハッキリ言ってかなり恥ずかしい。

少し足の露出が多いし、男の子のものだから、胸元が目立つ。

視線の内の幾つかは胸元に向かっている。

凄く恥ずかしい／／／

そう思っていると、なぜか神哉が身悶えし始めた。

その後何か考えたり、私を見たり、何かを決意したりしていた。

今の神哉は誰が見ても変人だ。私より注目されてる。

少し恥ずかしい。やめて欲しいな・・・。

あ、電車が来た。

乗ったらどんな感じなんだろうか？楽しみだ。

視点神哉

やっと来たぜ京都——！

オバチャンらの目線を切り抜け、やっとこさ京都駅についてからすぐにタクシーに乗った。

その後リオンの言う場所まで送ってもらい、そこから山を登って、十分ぐらいしたところにそれは有った。

「うおう。なんじゃこりゃ。」

「これが天界とのゲート。ここは霊力を纏っている物しか入れないようになってる。同じように、霊力を使えないと、これは見えない。さあ早く入って。」

「え？これに、入るの？」

どう見ても光る竹なんだけど。地面から一メートル以上上は無い。切り取られてる。

その穴が光ってるんだが……。どうやって入れと？

かぐや姫！？かぐや姫になれと！？

「どうやって入るの？これ。」

「私が先に行くから、後から来て。」

すまん……。バカな俺で……。

リオンは竹に近づき、霊力を少し流す。すると一瞬でリオンが消えた。

え？それだけ？じゃあ俺も行こうかな。

まず竹に近寄る。そして霊力を流す……。おわあ！

え？どうなってんの？え？え？

そう思った瞬間、目の前の景色は、光る竹から活気のある町へと変化していた。

ただ、普通の町と違うのは、ビルなどが無く、江戸時代などを思わせる建物が多くあった。

しかしそこでゲームをしているガキンチョ。なるほど。よく見れば掃除機とかも有る。

ただ、普通と違うところは、町全体を高い鉄の壁で囲んで有るって所だ。

変な光景だ。

俺はリオンを探す。あ、見つけた。

「すごいな。ゲームが風景に似合わない。珍しい光景だ。」

「まあ、下界の技術を取り入れはしてるけど、家を変えたりするのは労働力が居るから、下界で手に入れられる物を持ってきているだけ。」

「へー。じゃ、行くか。」

話しながら、俺とリオンは町へ足を踏み入れる。

しかし、その瞬間町から一切の音が消え去った。いや、がしゃんという音が幾つか聞こえた。皿でも落としたんだろうか？

そして一人の男性が声を上げる。

「リ……」

リ？

「リオンが帰ってきたああああああああ！？」

え？どう言うことだ？

神哉の過去。神哉の決意。（前書き）

今回は町の人の顔見せのような物も兼ねてます。

誤字脱字、矛盾などのご指摘があれば感想まで。
アドバイスなどもお待ちしております。

キャラの名前のアイデアを下さったネガティブ妄想者様。
本当にありがとうございます。

神哉の過去。神哉の決意。

俺、阿断神哉には、どう言うことが全く分からなかった。

なんか、四十代ぐらいのおっちゃんが急に『リオンが帰って来たあああ！』などと叫んだのだ。その後
数秒の静寂の後、町中にはいろいろな音や声で溢れ返った。

先程と同じようにがしゃん！という音。

バタバタと音を鳴らしながら人が家の中から出てくる音。

ある方向からは歓声が聞こえ、またある方向からはザワザワという
んな言葉が聞こえた。

どう言うことだ？説明プリーズ。

・・・まで、落ち着け・・・。少し前のことを思い出してみよう。

まず俺達は天界へ拠点を移すべく京都へ向かう。

そして駅や電車内でかなりの注目を浴び、恥ずかしい思いをした。

ようやく駅から出て、タクシーに乗って天界へのゲートがある場所
へと向かう。

なんとゲートは小さな竹で、光っていた。

そしてそこに靈力を流し、天界のとある町へとやってきた。

そしてその町へ足を踏み入れた瞬間おっちゃん絶叫。
↑さっきまで
ココ

町がザワザワ↑今ココ

まで。なぐんか分かった気がする。俺の予想はこんな感じだ。

1・リオンは最初に出会ったとき、神にやられたといていた。

2・ここは靈力を使えるものが集まる町。神と対立中。

3・リオンはここに住んで居て、家まである。

この三つから思いついたのは、

【リオンは元々この町に住んでいて、自身も神と戦っていた。で、その神と戦いに行く。しかしそこでコテンパンにやられ、下界へ落とされ、俺と出会う。】

これが一番可能性が高いと思う。

町の人の反応も、リオンが死んでしまっていたと思っていたのなら当然の反応だろう。

リオン、人気者なんだな。

「ガルドさん……。」

ガルド？おっちゃんの事かな？

「うつ……リオンちゃん。よく帰ってきたなあ……。てっきり死んじまったかと……。」

「なんとか、戻ってこれた。」

「よかった。本当に良かったぜリオンちゃん。生きてて良かった……。それに、もう婿さんまで見つけてくるとは……。歳は離れちゃいるが、おっちゃん応援するからな！」

オイ。

「ちょっとおっちゃん。俺は婿とかそういうのじゃなくて……。」

「・・・下界で見つけた、協力者。」

「え？婿じゃないのか？やっぱリオンちゃんにはそういうのは早
いよな！・・・リオンちゃんに手エ出したら殺す。ミンチ肉に
してやる。（ぼそっ）」

怖い！怖すぎるよ！すごいオーラ纏ってたよ！

怖い顔をリオンの死角でしていたガルドさんは、すぐ思案顔になる。

「それにしても・・・協力者か。確かに、靈力は膨大な量が秘めら
れている。」

「神哉は、下界で命が危なかったとき、助けてもらった。」

俺を指差して言うリオン。いや、なんか恥ずかしいな。

「なるほど。神哉って言うのか。俺はガルドだ。好きに呼んでくれ。
あと、リオンちゃんを助けてくれてありがとうな。これは、たぶん
ここに居るみんなの気持ちだと思う。」

「いえ、リオンを助けたのは偶然ですし。・・・それにしても、リ
オンは人気者なんですね。」

「ああ、リオンちゃんは数年前にここに来たんだが、そのときはま
だ小さい子供でな。人見知りも激し
くって、いつもみんなから隠れていたんだ。まあ、丸見えだったん
だけだな。それがまた可愛くて・・・（以下終わりが見えないほど
のリオンの可愛さ自慢）」

うおお、凄い。ここまでリオンの事で言えるなんて・・・。

周りの人も皆口々にリオンの良いところ、可愛いところを挙げていつている。

当のリオンは物陰に隠れて照れていた。確かに丸見えだ。隠れるの下手なんだなあ・・・。

「そういえばガルドさん。」

「でな、七歳のときの誕生日にな・・・ってなんだ？まだまだ有るんだぞ。」

「はは、まあ、それは今は置いて、この町の町長に会いたいですが。」

「あん？サリーナに？まあ、いいけどよ。何するんだ？」

「ただ、挨拶ですよ。」

やっぱり、挨拶は必要だと思う。

「おまつ！本当はリオンちゃんの彼氏とかじゃないよな！？違うよな！」

「は？どう言つことですか？」

「そりやお前、親に挨拶つて言つたからよ・・・。」

ん？良く分からのだが。

「だから町長に会いたいですって。」

「だからその町長のサリーナがリオンの親なんだって。分かったか？」

「……マジっすか？」

「本気と書いてマジと読む。」

「まあ、本当にそんな関係じゃないですし、ちよこつと挨拶して返ってきますから。」

顔出して、挨拶して、少し聞きたいこと聞いて。

「挨拶……ねえ。あのサリーナがそんなに簡単に終わらせてくれるとは思わ無いんだが……。」

「変人ですか？」

あえて思ったことを率直に聞いてみる。ほら、アニメとかだったらこういうこと言われる人は大抵変態だったりするじゃんか。

「変人ではないな。まあ、自分がやりたいと思ったことはすぐに実行するような奴だ。」

「神哉。これ持ってけ。使い方は分かるな？ここを押すと電流が流れる。」

うおおおおおい！そんなに危ない人？

「あ、いいです。俺も持ってますから。」

俺の鞆は武器庫だ。

あの後俺はガルドさんに案内されて町長の・・・サリーナさんの家へと到着した。

家はその辺りにある家とそう変わらない家だった。

町長は老人を想像していたから、普通の女性で、リオンの母親だとは思いませんでした。

俺は玄関の呼び鈴を鳴らした。少し経って機械から声が聞こえてくる。

『はい。どちら様でしょうか?』

えっと、確かガルドさんが伝えてくれていたはずだから・・・

「ガルドさんから聞いていると思います。阿断神哉と言つ者です。」

『ああ、君がリオンを連れて来たつて言う!待つてたよ。入つて頂戴。』

「お邪魔します。」

扉を開け、中に入る。

靴を脱ぎ、きちんと並べてから人の気配がする部屋へと向かう。

そして襖を開け、中に入・・・つてうわあ!

「うおお!?ほっ!はっ!」

入つた瞬間に四方から矢が飛んできた。まあ、驚いたがこのくらいならかわせる。

少し身を捻り、当たりそうな物を手で弾いてかわす。

少し驚いたが、何も問題は・・・殺気!?

「後ろかッ!?!」

後ろを振り向く。そこには真剣を振り下ろしてくる何者か。

得物を持っていない俺には完全に不利な状況。だが・・・甘い！

「真剣白刃取り！」

両手の指で受け止める。少しこの技を齧っていて良かった。

そのまま靈力での身体強化を強く掛け、真剣を折る。

その後折った真剣の手に残っている方を投擲し、けん制した後膝の後ろへ蹴りを入れる。

所謂ひざカックンと言う奴だ。そして相手が体制を崩した瞬間に腕を後ろへと捻り、拘束する。更に懷のナイフを出し、首に押し当てる。少し血が出ているが、血管等は傷つけていない。

「お前は何者だ。応えねばこの首が飛ぶぞ。」

男・・・いや、女か。そいつは何も言わない。

少し痛めつけようかと懷に手を入れ、ライターを取り出す。

ライターをつけ、耳にライターを近づかせて行く。

そのとき、女が笑った。なにを・・・

「グ・・・ガッ!？」

(な・・・んだ?)

見ると女の後ろに以前リオンに見せてもらった靈力弾が大量に展開

されている。

（うわ・・・こんなことも出来るのか・・・。）

はつきり言って勝てない。最大にまで身体強化しても防ぎきれるか
どうか・・・。

しかし、戦うしかないので構えを取る。ナイフは遠くへ飛ばされて
しまった。

だが・・・得物なしでどう戦った物か・・・「あっはっはっは
っ！」・・・へ？

急に目の前の女が笑い出した。気でも狂ったか？

すると女は霊力弾を全て消し、殺気も消して近寄ってくる。何を考
えている・・・？

バタンッ！

「オイッ！サリーナ！何があつた！？物凄い音が聞こえたんだが・
・。」

え？ガルドさん？それにサリーナ？すると目の前の女が髪をぼりぼ
りと掻き・・・

「たはゝ。ちょっとお遊びのつもりでやったらこうなっちゃったん
だよねゝ」

「またか・・・おう、すまんな神哉。こいつがサリーナだ。」

ガルドさんが目の前の女を指差す。え、まさかこの人がサリーナさん？

この町の町長でリオンの母親？

「いや、リオンが連れてきたやつがどんな奴か試してみたかったんだ。結構強いよ、この子。ちょっとやばかったかも。拷問されかけたし。」

うつ。そのことに関しては言わないで欲しい。

「拷問だあ！？お前、なにやってんだ！？」

「す、すいません。強盗か何かだと思ったもので……。」

「まあ、いいのよガルド。私からやったことだし。」

なるほど。確かに、やりたいことはやる性格のようだ。

「まあ、それなら文句はねえが……。」

「じゃあガルド。少し席を外してくれない？この子に話があるから。」

「

俺達はさっき暴れた部屋の、隣の部屋で話することになった。

「じゃあまずは自己紹介ね。私の名前はサリーナ・アルナ。サリーナって呼んでね。」

「私は阿断神哉と言います。」

「もうっ。硬くならなくていいのっ。普通にしゃべってくれてOKよ。」

「分かりました。」

固いのは正直苦手だ。

「じゃあ、ちょっといろいろ聞くから応えてね。」

「はい。できる限りは。」

「ありがとう。じゃあ、どうやってリオンと知り合ったのか教えてくれないかしら?」

リオンと知り合ったきっかけ・・・か。

「俺が家の裏山で訓練をした後、下山していたらボロボロで倒れているリオンを見つけ、介抱した。そしてリオンが霊力を使ったことにより霊力の存在を知った。こんな所だ。」

「ふむふむ。つまりまったくの偶然・・・と。」

そうなるな。

「そうなりますね。」

「じゃあ二個目の質問。何でリオンに協力する気になったの？」

「俺は神話や伝説に出てくる神と言う存在が大嫌いだ。しかし神様など存在しないと思って絶望していた。そこにやってきたのがリオンだ。俺が食いつかないわけが無いだろう？」

「なるほどね。貴方の霊力の量から見ると、かなりの嫌悪を抱いていたのですね。差し支えなければ、嫌う理由を教えてくださいませんか？」

・・・どうする？教えてしまった方がいいのだろうか？

ふむ。やはりこれから味方になる人だ。教えておいたほうがいいだろう。

「俺は・・・神が俺という人間を創ったことが許せない。」

「え？」

「これは俺の考えだが、神が俺を創ったことは良い。だが、なぜ植物や虫に創ってくれなかったのか？なぜ、人間として創られたのか！？俺の怒りは、神が俺という人間を創ったことへの怒りだ。それ以外になにも無い。考えても見る。人間は生き物の仲でかなりの長寿だ。長生きすれば100年ぐらい生きることもある。ただ、いくら生きたところで、待っているのは死。更にはただ生きて行くだけでも働き、労働しなければならぬ。どうせ、いくら働き、裕福な暮らしをしても死しか待っていないというのに。例えば楽しいことがあっても未来は死。変わらない。むしろもつと生きて居なくなる。それでも未来の死と言う選択は変わらない。人間は生きていと言ったって、臓器の力で動くだけ。意識があると言ったって、それは唯の脳の機能。人生は、長く、辛い拷問だ。自ら死ぬにも恐怖という枷が邪魔をし、結果的に拷問を受け続けるしかない。俺は、植物や虫に生まれたかった。少ない命で、懸命に生きたかった。だから俺を人として創った神が憎い。俺は絶対に神を殺す。たとえ命と引き換えでも・・・だ。ま、こんな所だ。」

無言。場に静寂が訪れる。

「・・・・・・・・あなたは」

サリーナが口を開き、言葉を紡ぐ。

「あなたは・・・どれだけ苦しみ、どれだけ神への憎悪を募らせていたの・・・？」

どれだけ苦しみ……か。

「大体、十二の頃からだ。とある理由で学校に行かなくなり、大人に迫害され、祖父や祖母にさえ邪魔者扱いされるようになった。唯一味方だった父と母も、父は大病を患い、母は、学校に行かない俺を不登校児用の施設へと通わせてくれた。その施設には、毎月十万近い金がかかり、兄弟も三人居た。おれは、悩んださ。生きていいのか・・と。俺が生きていたら母や弟たちが苦しむんじゃないかと。自殺したかった。出来なかった。殺人鬼に出会いたかった。出会えなかった。母は、金のことは気にしないで良いと言ってくれた。だが、その言葉も夜中まで仕事をして、数時間しか睡眠を取らずにまた仕事へ行く母を見ていた俺には凄く重たい言葉だった。本当に、死んでしまいたかった。楽になりたかった。母にこれ以上迷惑を掛けたくは無かった。だが、死ねない。恐怖がある。殺されることも無い。俺は神を呪った。俺なんていう人間を創った、神を。」

「あなたは、それからどうしたの？」

「俺はそれから、必死に体を鍛えた。いつか、神を殺してやると誓って。ハハ、可笑しい話だろ。居る

はずも無いと分かっている神を殺すために体を鍛えたんだ。そして、高校生になり、アルバイトをしまくってがむしやらに金を溜めた。その金で、全国へ回り、武術の達人たちに弟子入りした。そこで更に鍛え、力を付け続けた。」

「神なんて居ないと……分かっていたのに？」

「そうだ。そうでもしないと精神が崩壊しそうだった。もう俺には、

それだけが生きがいだった。そし

て世界中の達人に技を学び、日本に帰った。日本に帰ったときには母はもう亡き人となっていた。俺は誓ったよ。必ず神を殺すと。俺なんかという存在を作って、母さんを苦しめた神を殺すと。そう誓って、訓練を重ねて三年。そこにリオンが現れたって事だ。これが俺の過去だよ。」

「神様を殺しても、お母様は喜ばないと思うわよ。お母様だって、あなたのことが可愛いから、愛しいから身を粉にして働いてたのよ。あなたはそんな事せずに下界で暮らしたほうがいいと思うわ。」

そんなことは・・・分かっている。

「そんなことは分かっている。母さんが復讐を望まないことなんて・・・でも、俺は神を殺す。全ての神を殺す。そして俺も死ぬ。」

「自分も死ぬ気？」

「ああ、この悲しみを・・・俺は絶対に終わらせる。神を殺し、自分を殺し、この長い悪夢に終止符を打つ。これが、俺の唯一つの願いであり、救いだ。」

母さん。俺は、あなたにもらったこの命で、神を。そして、自らを滅ぼす。

親不孝だっけのは分かっている。でも、これが最後の親不孝だ。

そう遠くないうちにそっちへ会いに行く。そのときはいくらでも親孝行するよ・・・

だから待っていてくれ。母さん。

第7話（前書き）

うーん。いつもより少し少ないですね。量が。

今回は結構ストーリーを進めました。

文字数いつもより少ないのにストーリーはいつもより進むって・・・
ハア。

感想、アドバイスなど待ってます！

第7話

俺とサリーナさんはいまだ向き合い座っている。

「サリーナさん。今度は俺の質問に答えて下さい。」

「分かったわ。応えられる限り……ね。」

つまり、答えられないこともある……ということ。

「じゃあまず一つ目。リオンが下界に來た理由だが、俺は神を殺しに行つて返り討ちにあつた。そう考えているが、合っているか？」

「ええ、合っているわ。リオンを隊長に五十人の部隊を組んで向かわせたわ。でも、返り討ちにあつて……部隊の皆は歸つてきたけどリオンだけが歸つてこなくて……。」

「ふむ、そういうことですか。ちなみに、どのような神に挑みに？」

「オーディンよ」

「ブッ！……؟؟ゲホッゲホ！オーディンってあの全知全能の神の！？」

「そうよ。あの神の持つ知識は厄介なの。だから早く殺してしまおうと思つただけねど……兵士の話によれば、グングニルが厄介だつたそうよ。」

グングニル・・・絶対に的を外すことがなく、更に最終的に持ち主の手に戻るといふ槍。

なるほど。そんなもの使われたらやられるのも無理はない。

「・・・まあ、その件はまた今度。二つ目。貴方とリオンは本当の親子じゃありませんね？」

「そうよ。あの子は私が拾ってきた子なの。下界で一人で泣いていたところを見つけてね。酷い有様だったわ。あの子の家は燃え、あの子の家族は皆惨殺されていた。あの子が泣いていたのは下半身のない母親の骸の傍。白い髪は母親の血で真っ赤に染まっていたわ。」

下半身がない母親・・・惨殺された家族・・・やはりあの夢はリオンの・・・。

「良く分かった。後俺が知りたいのはこの町のことだ。」

「と言うと？」

「この町は神と敵対してる。で、一度オーディンを攻めてボロ負けしたんだ。もしかしたら神が勝負を仕掛けてくるかもしれない。多少はこちらの兵力も減ってるんだろ？」

神だってこんな好機を見逃す訳無いしな。

「一応、その辺りは警戒してるわ。いつでも戦えるようにと指示を出して、見回りも増やしている。一応、大丈夫なはずよ。耐えるだけなら。」

「そうですか・・・じゃあその辺りはお任せします。それでは最後に。」

「まだあるの？まあ、最後だって言っんならいいけど。」

これだけはお願いしないと。

「この町で一番強い強化系の人を教えてください。」

「あら？それなら貴方も知っているでしょう？。」

え？そんな人知らないんだが？

「そんな人知りませんよ。」

「この町で一番の強化系使いは・・・。」

今俺は町を歩いている。

あの後サリーナさんが言った人物は俺も知ってる人だった。

まさか・・・まさか・・・ガルドさんだなんて！

『今は引退してるけど、いまだに衰えはしてないわ。あの人は強いわよ。昔オーディンと一人で勝負して引き分けた人だから。』・・・らしい。

はっはっは。はっちゃけてたんだなあ、おっちゃん。

む、考え事をしてる内に着いたようだ。

コンコンコン・・・と、ノックをする。少し経ってから扉が開いた。

「誰だ・・・おお、神哉じゃねえか。どうしたんだ？」

「少しお願いしたい事がありまして・・・。」

「そうか、まあ立ち話もなんだ。中に入れ。」

ガルドさんが中へと入って行く。俺もそれに続いた。

「ここが俺の家だ。」

「お邪魔します。」

そこは結構片付いた家だった。ん？

「ガルドさん。ここに貴方意外に住んでる人って居ます？」

明らかにガルドさんの物ではない物が幾つか置いてある。奥さんかと考えたが、明らかに男物。

「ああ、此処に一緒に住んでるやつが居てな。孤児何だけどよ、俺が面倒見てる。」

「そうなんですか。」

そう言う事か。まあ、余り気にする事でもないな。

俺はガルドさんについて行く。行き着いた先は・・・道場？

「あの・・・ガルドさん？」

なぜ道場？いや、鍛えてくれって言いに来たわけだから道場でもかまわないのだが・・・。

「霧弥。お前が言いたいことは分かる。大方鍛えてくれって事だろう？俺のことはサリーナにでも聞いたか？」

「まあ、そういうことです。しかし、良く分かりましたね。」

「ま、お前がまだ未熟だって言うのは出会ったときから分かってたしな。」

「うつ・・・。」

未熟ってばれる位未熟だって言うのか・・・。

「た、確かに俺は未熟です。だから、ガルドさんに鍛えてもらおうと・・・。」

「だから、それをどうするか決めるために道場に來たんじゃねえか。さあ、かかって來い。俺に一撃でもクリーンヒットさせることが出来たら合格だ。鍛えてやる。」

それはつまり、それすら出来ないなら鍛える気はない・・・ということ。

・・・よし、やってやろうじゃねえか！

俺は鞘から木刀を取り出す。そしてそれを強化する。予備としてもう一本を腰に刺す。

「分かりました・・・では、行きますっ！」

試合開始直後に瞬動で肉薄する。そしてガルドさんの腹へと木刀を叩き込む。しかし・・・

「おお、いい動きじゃねえか。それに打ち込みも鋭い。だが・・・俺には効かないぞ！」

俺の放った木刀は真っ二つになっており、ガルドさんはそこから一歩も動かない。

それどころか痛みさえ感じていないかのように見えた。

そしてガルドさんのパンチが俺の腹に当たる。

「グホッ・・・ガッ・・・！？」

（あ、ありえない・・・。完全に当たった。手ごたえも有ったし普通の人間なら真っ二つになるかもしれないくらいの攻撃を受けて平

気だなんて……。）

実際これで木を切ることが出来た。しかし、その攻撃をもってしても傷一つ無い体。

「クッ……う・ゴハアッ!？」

吐血。つまり内臓に傷が付いたと言う事。

唯でさえ強靱な肉体に更に霊力での強化を行った。

その体でさえも、内蔵までのダメージを許してしまう拳。レベルが違う。

（や、やばい。レベルが違う。どうすれば……）

考えつつ予備の木刀を取り出す。・・と、ガルドさんがはじめて動いた。

「ムンッ!」

唯の右ストレート。木刀の腹で受け流す。

しかし、受け流したのにも拘らず木刀に罅が入る。それほどの威力だった。

そして蹴り。膝で受け止める。膝が割れたかと思うほどの衝撃が来た。

瞬動で距離をとる……が。

「瞬動は、俺も使えるんだぜ。」

「な……?」

もう一度右ストレート。とっさに左腕で防ぐ。

「グ……………」

多少拮抗する。先程より強力に、本気で身体強化をしていてよかった。

顔を狙い蹴りを放つ。蹴りが直撃する。その感覚は、肉ではなく鉄を殴ったような感覚。

一度跳躍し、距離をとる。

（どうする……？当たったとしてもダメージが無い。ダメージを与えてこそその合格だ。どうする？どうすればいい？）

無意識に、右手の木刀を握り締める。

そこで気づく。ダメージを与えないのなら、ダメージを与えられる物で攻撃をすればいいと。自分の分野は強化だ。物を強化するのに長ける分野だ。

なら、強化すれば良い。ダメージを与えない物でも強化してダメージを与えられるようにすれば良い。俺は、身体強化を全て解いた。

そして、全ての靈力を木刀の強化へと回す。防御も何もかも全て捨て、木刀を強化する。

「何しようとしてるかは分かんが、よそ見してる暇は無いぞ！」

ガルドさんが迫ってくる。俺は木刀を構える。

まず、一撃でも食らったら粉微塵だ。自分が当たらずに、相手にだけ攻撃を当てる。

それをやつてのければ勝てない。突っ込んでくるガルドさんに合わせ、瞬動を使う。

いつもより体制を低く低くし、突っ込む。

振り出されるガルドさんの拳を紙一重で交わし、木刀を叩きつける。

「なっ!？」

木刀が折れる。だが、ダメージは通った。ガルドさんが驚いている。

その隙に身体強化をもう一度する。

それが終わった瞬間、ガルドさんの拳が俺に当たった。

「ぐはっ……………」

く……意識が……ヤバイ。

やはり即席の身体強化じゃ限界があったようだ。

消えそうになる意識を必死で繋ぎとめ、ガルドさんを見る。

ガルドさんは、腹を少し撫で、こちらを向いてから言った。

「うむ。合格だ。稽古をつけてやろう。しかし、防御を捨てるとは・・・よくそんな事できたな。下手すりゃ死んでたぞ?」

「それしか・・・無かったものですから。」

「まあ、しょうがねえか。明日から稽古つけてやる。頑張れよ。」

「あ・・・ハイ!」

よかった。合格は貰えた様だ。と、その時。

ダダダダダダダ!ガラッ

いきなり足音が聞こえたかと思うと、道場の扉が勢いよく開いた。

「ガルドさん!大変だ!」

「ん?どうしたんだ、喧嘩でもあったのか?」

ガルドさんが言う。しかし、入ってきた青年はとても慌てた様子で言い放ったのは・・・

「神が・・・神が攻めてきました！」

俺と神との初めての接触を知らせる言葉だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3550w/>

神なんて嫌いだ。

2011年11月28日01時45分発行